台湾産オゴノリの導入

嘉数　清

台湾で養殖されているオゴノリ *Gracilaria* sp.を昭和58年4月3日と59年3月4日の2回、約5kgずつ導入したが、いずれの場合も次第に衰退し繁茂しなかった。

第1回目導入のオゴノリは、屋外コンクリート水槽に収養し、海水と淡水をほぼ2：1になるように半流水にして繁茂するのを期待したが、繁茂する様子は見られず、結局、導入後30日後頃に水道水が大量に流れこむという事故により枯死してしまった。第2回目に導入したオゴノリは、一部はチョウチン籠に入れて糸満漁港内に垂下し、残りは屋外コンクリート水槽で海水の半流水下におき様子を見たが、いずれも次第に衰化し、半年後には消滅した。

台湾ではオゴノリ養殖が盛んに行なわれ、寒天原藻として用いられるとともに、オゴノリを餌料として地元産アワビ類の養殖が行なわれている。林（1974）によると、台湾には5種類のオゴノリがあるが、養殖対象種は菊化心と呼ばれる種類で、養殖池の適当な塩分濃度は20～25‰である。このことから考えると、今回の導入オゴノリが繁茂しなかった大きな要因として、塩分濃度が高すぎたのではないかと思われる。

沖縄でウニや貝類の増養殖を進める時に常に問題となるのが、餌料海藻が不足するのではないかということである。従って、本県沿岸で周年安定して得られる海藻類の増殖を図ることが、今後の課題の一つであり、そのため台湾産オゴノリの導入を試みたのであるが、今回の結果から、台湾の養殖オゴノリが本県沿岸で容易に繁茂するとは期待できず、たとえ繁茂するにしても低塩分域の極く狭い水域に限られるであろう。

参考文献

林　明男（1974）：龍鬚菜養殖。水産養殖浅説No.51、台湾省水産試験所。